社会福祉法人
ミッドナイトミッションのぞみ会

ホームページ QRコード

X QRコード

2024/12/1　No.97
発行者：社会福祉法人　ミッドナイトミッションのぞみ会
本　部：〒293－0023　千葉県富津市川名1436番地

手間と時間をかけて

望みの門京葉後援会会長
日本基督教団松戸教会牧師
社会福祉ピスティスの会理事長
村上　恵理也

教会ではクリスマス前の約4週間をアドヴェント（待降節：たいこうせつ）と呼んでクリスマスの準備期間とします。

この期間には「アドヴェント・クランツ」という冠（クランツ）の輪をなぞるように並べた4本のろうそくに「今週は1本」、「来週はもう1本」と火をともします。このクランツを囲みながらクリスマス物語を聴いて、マリアとヨセフ、天使と羊飼い、そして博士たちの姿に思いを馳せます。あるいは、クリスマス・ツリーを出したり、リースを玄関先に掲げたり…と、クリスマスが近づいていることを手間と時間をかけて意識し過ごします。

望みの門のアドヴェントにもこの備えがあり、施設にはそれぞれ独特の雰囲気があるのだと想像します。「今日がクリスマスだ」と慌ててごちそうを並べる「お祭り騒ぎ」ではなく、備えて待った先に迎えるクリスマスには、静けさのなかにも確かな喜びがもたらされることでしょう。

ある男の子の話し。物心ついて数年経ったアドヴェント、彼は例年のように「クリスマスにはどんなプレゼントがほしいの？パパがサンタクロースに伝えるから教えて」と聞かれます。しかし、彼は口を開きません。その後、父親は何度か好機を伺いましたが、男の子は黙ったまま。刻一刻と「期限」は迫り、ついに父親は踏み込んで聞きました。「これではサンタクロースがプレゼントを持って来られないよ。どうしてパパに教えてくれないのか、教えて。」これに男の子はただのひと言、「サンタさんは（ぼくのほしいものを）知っているから」と。彼の一本勝ち、父親は「そうだね」とうなずくほかありませんでした。

この男の子にとってサンタクロースは「自分が必要とするものを自分と同じように知っていてくれる存在」なのでしょう。自分ならざる他者に信頼を寄せることができる。それは口で言うほどやさしいことではありません。他者への信頼、それはおそらく、自分の必要を他者により満たされた原体験をもつ人が後天的に獲得する態度なのでしょう。

今、思うのは、望みの門のすべての働きは利用者の方に、この信頼を呼び覚ますために、昼夜を分かたず続けられていることです。利

用者のなかには入居当初、この信頼を知らない方――あるいは遠い昔のものとして失った方――もいらっしゃることでしょう。しかし、望みの門の働き人の手のわざ、心のわざによって、その方のなかにこの他者への信頼が生まれることを信じます。

さらに、そのわざを遡ればクリスマスの恵みにたどり着きます。神さまは暗闇の世にまことの光、主イエス・キリストを送り遣わしてくださいました。それは闇の世に生きる人が必要とするプレゼント、否、人が必要と考える以上の恵みのプレゼントです。

この恵みを毎年、手間と時間をかけて喜び祝うすべての人に、神さまへの信頼という、このうえない恵みのプレゼントがもたらされますように。

京葉後援会研修会報告

10年目を迎えようとしている施設の現状

児童心理治療施設望みの門　木下記念学園
施設長　佐京　正範

2024年10月24日に木下記念学園にて京葉後援会の皆様が集う研修会が開催されました。その折に木下記念学園の現状をお伝えする機会を得ましたのでご報告いたします。

2016年5月1日に開設した木下記念学園。当時は情緒障害児短期治療施設、略して情短。関東圏域において東京都は情短をつくらないと方針を打ち出しており、千葉県のみがつくりたいのにつくれない県でした。千葉県や他法人が名乗りを上げない中、のぞみ会の基本方針「先駆的福祉活動」を担うべく手を上げ開設したのが9年前。一節目の10年目を迎えようとしているのが木下記念学園の今です。

京葉後援会の皆様にお伝えしたいことを整理しつつ、色々な起きた出来事を羅列しても前を向いていない気がし、これまでをさらっと振り返りたいと考えました。しかしさらっとはいかない出来事が多く、多少濃い振り返りになったかと思います。入所を止めざるを得ない初年度。気持ちが折れていく職員集団。初年度末、私はそんな状態を露知らずこの施設に加わり、子どもの状態も然ることながら一筋縄ではいかず、支援する職員の必死なもがきを感じた時でした。

当時の木下記念学園には圧倒的に不足しているものがあり、それを伝えることが私自身の役割と知りました。不足しているもの。それはビジョン、見通し。上る先の頂上に何があるか、今の位置はどこか、一言で伝え、そちらに向かうにはあまりにも経験の浅い職員集団であったと思います。研修会ではお伝えしきれませんでしたが、私の手法はスクラップ・アンド・ビルド的な強引な手法で職員に階段を示し、上るよう示唆したものです。研修内で触れたサーバントリーダーの理屈を伝え続けたことに意味があり、今は初年度に感じたバラバラな集団とは一味違うチームだと思います。若手や経験の浅い職員の発想を足らないと却下・一蹴するのではなく、リーダーがその発想を受け止めアイデアを盛る、最後に施設長が責任をもつ。尚もブレている時には喝を入れる瞬間もありますが、徐々にチーム力が生まれ、職員同士補い合う集団となりつつあります。

ご提示した資料の一部抜粋。「難しい子どもしか来ない施設。県が造らずのぞみ会が開いた意義は大きい。のぞみ会の知名度も上がり、実感として発信力も上がった。その一方で、本当に難しい施設。全国をみると心理治療施設は公立が半数以上。なぜかといえば人手が必要で財源に困りやすい施設だから。あるいは離職者の補充をしやすいから。私立運営の施設は法人内の精鋭を集めている。…望みの門の精鋭といえるのか木下記念学園は。愚痴では済まず、やるしかないのがここ。限られた人材、設備。事故も多い。ここしか無いから来る子どもたちに応える使命感。たった一つの施設なのに反省ばかり。９年間反省している。」

まだまだ厳しい登坂の位置にいることを職員自身が感じるまで、よく辿り着いていただいたと職員全員に敬意を感じる９年間だと思っています。一方で噛み締めないとならないことは子どもたちの声に応えられたのか。職員目線、上から目線でやり過ごしてはいないか。職員同士のジャッジメントが求められます。馴れ合いできないキツイ段階とも云えます。更にもっと子どもの内面に近づき、褒めることを焦点とした治療の一歩をチームで見つけ合う職員集団が次なる段階・目標です。研修会を終え、後援会の会長をはじめ会員の皆様から応援の言葉を頂戴いたしました。以前であれば単体運営できない施設として恐縮とプレッシャーだった言葉が、この度は全職員に聞かせ、全職員が安心してもらいたい言葉だと感じました。

反省するのは私の役目。職員一人ひとりは胸を張ってもらいたい。そんな解釈をしつつ、改めて振り返りとこれからのビジョンを語る機会をいただいたことに感謝を申し上げます。

東京望みの門　自立援助ホーム　マナの家

私の八十五年

調理員　舌間　允子

11月の誕生日で85才が終わります。これを機に、マナの家の調理員としての13年間に終止符を打たせていただくことにしました。20代最初の職場は、１９５０年中期から始まった日本の高度経済成長期の入り口、１９６０年代を約10年近く東京証券取引所に勤めました。日本初の機械化（コンピューター化）が導入された時を同じくしての入社でした。計算室に配属され、ミスの無いよう努めたり新しいシステムの凄さに驚いたりと、緊張と感

動の連続でした。外国市場と関わるため日をまたぐことも多く、ホテル泊、朝食を済ませ送迎の車で職場に戻る、自宅に帰るのも不規則な繰り返しでした。多忙な日々ではありましたが若さはものともせず、活気の真只中希望と魅力に包まれた充実した時期でした。

離職して子育てもほぼ見通しのついた頃に、自宅近くのＩＣＵ（国際基督教大学）の図書館で、サーキュレーションとレファレンスの業務を臨時職員として４年間通いました。40代半ばから、都内の社会福祉法人で老人、障がい者、児童等各施設に関わり、定年の65才まで従事しました。縁あって、マナの家の調理員になりました。72才になって間もない時期でした。私は勿論のこと、マナの家の方々も高齢者がこの様に長い間勤めることは想定外のこと。マナの家の職員の方々の好意と助力のお陰と感じております。直接職ではありませんでしたが、入寮の方々に接することも多々あり、若々しい娘さん達が身近に居ることの喜びも味わいました。彼女達がマナの家で伸び伸びと溶け込んで生活している様子は、傍目にも嬉しいものでした。入寮者「個」への尊重、心に沁みる手厚い対応、職員方の姿勢があってのことです。

最後の職場がマナの家という最高の場所であったことが幸せでした。職業人としての社会参加が終わると思うと寂しさが募ります。マナの家の皆さま、長い間ありがとうございました。

女性自立支援施設　望みの門学園
女性自立支援施設での新たな挑戦

心理相談員　臼井　嘉介

今年度４月よりふくしネットから望みの門学園へ異動となりました。異動のお話をいただいた時には正直驚きました。法人内に心理相談員の方が働く職場として学園があることは知っていましたが、女性自立支援施設（旧婦人保護施設）である望みの門学園には今まで女性の心理相談員の方しかその職に就いておらず、男性心理士である私の異動先になるとは全く思っていなかったからです。男性心理士としてどのように貢献できるのか、最初は戸惑いも感じました。しかし、田尻施設長とお話しさせていただき、新法が施行され女性自立支援施設となる学園に新しい風を入れたいと言っていただいたことで、異動を前向きにとらえることが出来ました。

異動して間もないころは心理相談の職員として配属されていてもすぐにご相談があるわけもなく、まずは顔と名前を覚えてもらうために様々な所に顔を出させていただきました。具体的には生きがい活動にお邪魔させていただいてそこに参加されている利用者さんとお話しをさせていただいたり、個別の面談を設定してじっくりとお話を伺ったり、お仕事帰りのお時間をいただいてお話をする時間を作っていただいたりしました。

学園に勤めはじめて生活を体験した感想としては、美味しい食事が提供されており、朝の会での運動やラジオ体操をし、集中して活動に取り組むという良い循環が作られており、自分も健康になりそうだなと感じました。しばらくしてだんだん顔と名前を覚えていただき、今ではありがたいことに定期的に面接

やパソコンを習いに来てくださる方もいらっしゃいます。

これからの課題としては、利用者さん同士のトラブル（発達特性や知的能力の差などが原因となる場合）の解消と予防、利用者の方が日ごろからストレスをためずに解消していけるような面接や環境づくり、職員の方への心理職視点からの情報提供などが挙げられます。ひとつずつ課題に取り組み、利用者さんの生活が豊かになるようにしていきたいと考えています。

養護老人ホーム　望みの門楽生園

楽生園に異動して…

支援員　増田すみよ

望みの門楽生園に2022年4月1日より異動し2年半が経過しようとしています。特別養護老人ホームとは違い、養護老人ホームは、対象利用者様は65歳以上の経済的・身体的・環境上の理由で生活が困難な方が、市町村の審査と措置判断で入所されています。

利用者の方から、朝は「今日も、よろしくお願いします」「おはようございます」と利用者様との声掛けで始まります。自立の方がいらっしゃるので、食後などの服薬時のコップ洗いや、廊下掃除や、庭掃き等のお手伝いもして頂いています。

ですが、私達支援員の仕事は多岐にわたり、期日までの提出書類の記入・提出は当たり前ですが、居室の整理・整頓・掃除、利用者の方の個人日誌から、ケアチェック表・モニタリング、緊急入所者の方が見えると所持品チェック表、ご自身で出来ない方のリネン交換等々、その中で「聞いて下さい」「ねぇねぇ～」「忙しそうだね」等と声を掛けられるとどんなに忙しくとも手を止めて傾聴しています。冗談を交えてのコミュニケーションや、そんな風に声を掛けて頂ける幸せを感じつつ仕事をさせて頂いています。時折、「聞きたいことがあるんだけど」と声かけられて今、手が離せないと言う事もありますが「これが終わったら行きますね」と声を返して業務が終わり次第、伺って傾聴しています。

新規入所の利用者様には、お互いに信頼関係を築く上で最初の接触が大切です。親し過ぎない態度で、慣れ合い口調にならないように等、利用者様の様子を伺いながらの支援に心掛けています。

支援方法も、個人個人違いますし、話し方や傾聴の仕方も違います。利用者様は色々な経験を積んで来られているので、どの支援方法がその方に合っているのか、正しいのかを模索しながら、意思の疎通や気持ちが通じているので分かって頂けていると思っています。コミュニケーションをとるにも難しい事も沢山あります。聴覚・視覚・言語能力の低下・認知症などの障害をもっている方です。お互いの理解が無いと会話は成り立たず、お互いがストレスや負担になってしまいます。お互いに楽しい話をしていてもかみ合わないと精神的負担が生じて楽しい話が伝わらずにストレスになるのは悲しい事です。伝えたい事、相手が伝えようとしている事に、耳を傾けてお互いがストレスなく精神的な負担も感じないで楽しく利用者の方と良いコミュニケーションを取りながら利

用者の方が笑顔で安心して過ごせる支援に努めていきたいと思っています。

特別養護老人ホーム　望みの門紫苑荘
紫苑荘に勤めて1年

介護員　古海　絵里

昨年、紫苑荘へ入職し働きはじめ2年目を迎えることができました。私は幼いころから大好きな祖父母と生活していて将来少しでも手助けできればと言う気持ちもあり、高校卒業後は福祉の専門学校へ進学しました。卒業後、迷いはありましたが地元である房総へ戻り、以前勤めていた特別養護老人ホームで18年間介護の現場でお世話になりました。

明るい性格ですが人見知りもあり最初はなかなか溶け込めず、勤めてから沢山覚える事もある毎日。ご利用者様の名前から始まりフェイスシートで情報を見ても実際その方と接してみないとわからないことも多く、良かれと思って会話をしても気分を損ねてしまうご利用者様と様々でした。いつしか不安な気持ちも大きくなる中、結婚・出産を機に仕事を続けようか迷いましたが、祖父の「もう少し頑張ってみたら。」という言葉が励みになり決心しました。数年前に富津へ移り子供が小学生にあがる年に職員としてもう一度働きたいと思い今ののぞみ会へ希望をだし就職しました。経験があるとは言え、紫苑荘では1年生。F勤というフリー勤務ですが、入浴介助に携わる際オムツの当て方、ご利用者様の皮膚状態、看護員との連携、様々な事を教えて頂きました。オムツの当て方にしても「これじゃー褥瘡になっちゃうよ。ここをきちんとこうして」と何度となく丁寧に指導してもらいました。

徐々に委員会、レク行事への参加、居室担当をもち先輩方に業務内容を教えて頂きながら少しずつ行うことが出来るようになったと思います。

ここでは書類作成はパソコン使用で私にとってはとても難関であり、お恥ずかしい話、まず慣れる事からでした。出勤したらまずパソコンを触る。介護連絡表を見る。今日の予定を把握する。と入職した当初と比べると少しだけ慣れたと思います。

少しずつご利用者様に私の事を覚えて頂けたのか、毎朝「おはようございます。」と挨拶をすると「おはようございます。今日も一日宜しくお願いします。」と笑顔で挨拶してくれます。それが何よりの嬉しさであり、今の私の一つの楽しみです。今後も笑顔を絶やさず、無理なく自分なりに努力し、まだまだ沢山の事を先輩方にご指導して頂き、責任ある行動でご利用者様と向き合っていけたらいいな。と思っています。

特別養護老人ホーム　望みの門富士見の里
富士見の里多床室の近況報告

介護員　嶋野　正子

近況として、3点、私見を交えご紹介させて頂きます。まず1つ目に、「今年の秋から遠足が解禁！」です。コロナ前は遠足として、食事、買い物、公園散策を実施しておりましたが、コロナが世間を騒がせてから遠足は中

止となっておりました。幾分か時が経ち、コロナもなりをひそめ始めた為、今年の秋から公園散策のみ実施可能となりました。公園散策の内容は、もみじロード経由佐久間ダム散策、利用者様をお連れし、行ってまいりました。その際、10月にも関わらず季節外れの桜が咲いておりまして、「ドライブに出かけて、思いがけない景色が見れて幸せ」と利用者様にも大変喜んで頂けました。

利用者様方にとって遠足は施設の外へ出る事のできる貴重な機会である為、来年は春にまた遠足に行き、可能であれば、食事・買い物も含めた形で遠足を実施できれば良いなと思います。

2つ目に、「行事もユニットと多床室の合同で実施可能！！」です。コロナが世間を騒がせてからは月の行事はユニット、多床室各々で実施しておりましたが、施設長の促しもあり、9月頃から合同で実施可能となりました。普段合う事の出来ないフロアの利用者様同士のふれあいがあり、「久々に顔が見れてうれしい」と喜んで頂けました。こちらに関しては各フロア間の交流を兼ねて今後合同で実施出来たらと思います。

3つ目に「ミャンマーの実習生について！」です。ミャンマーからの実習性が来て3年目に入りました。彼女らは当初は言葉や文化の壁がある中、各々が努力し成長する事により、現状は他の職員と同様程度に仕事が出来ております。更には、一緒に働いていても、理解力が高く、優しい人柄や気遣いが上手な様子が見られ、感心する事ばかりです。そういった所から、利用者様からも信用が高く、安心して仕事を任せる事ができるかと感じられており、当部署ではいなくてはならない人達になっています。「あなた達で良かった」といつも思います。

以上が、近況の報告です。アフターコロナとして様々なものが解禁できるようになると思いますので、それに合わせ、利用者様のQOL（生活の質）の向上そして、心やすらかな生活の為、多床室部門一丸となり、よりよいサービスを提供していきます。

老人デイサービス事業　望みの門デイサービスセンター

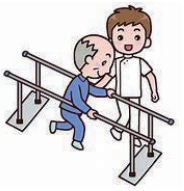
個別機能訓練について

看護士　海老原栄子

望みの門デイサービスセンターで働き始め、半年以上が過ぎました。初めの1か月は、前任者と共に過ごし仕事を覚えるのが、精一杯の毎日でした。現在もまだ至らない点が多く、スタッフにも迷惑をかけていることがあり申し訳ないと思っています。

「自宅でいつまでも元気に過ごすことができる」というテーマに基づきご利用者様の健康管理や身体機能維持・向上を目的とする個別機能訓練として小集団でのストレッチや体操、機械や器具を使っての運動などを行っています。色々器具や機械がある中で、ご利用者様より「これはどうしたらいいの？」「これはどんな効果があるの？」など質問も多いです。皆さんとてもやる気があり、「これやってみたい！」「あれもやってみたい！」等、

頑張っておられる方は多いです。ご利用者様に合わせられるよう、下肢筋力の維持・向上に繋がるような機械を使ってのプログラムの提供や、ご家族からの「自宅でこんなことがあったから、こういう運動をさせてほしい」などの要望にも対応させてもらっています。



また、体操を楽しみにされている方も多く、声をかけると「身体を動かしたかったの」とすぐに立ち上がり集まり、体操を行いながらご利用者様と笑い合ったり、「運動を始めてから、立っていられるのが長くなってきた」などの声もいただいております。

今後もご利用者様、一人一人に適するような個別機能訓練を提供できるように努めていきたいと思います。

就労継続支援事業 望みの門新生舎
防災訓練を重ねて思うこと

事務員　妻木　真希

新生舎では年間3回の火災想定の避難訓練に加え、地震による津波を想定した訓練を実施しています。私自身、福祉に携わっての避難訓練は初めての経験ばかりです。

今まで自分が行ってきた訓練は、「自分が避難する事が中心」でしたが、福祉に携わっている今、「利用者様を怪我なく安全に・速やかに避難させる事」が中心となります。訓練を終えると「あの動きでは配慮が足りない」など反省ばかりで簡単に正解を見いだせるものでは有りませんが、「意識して避難すること」を利用者様と学び続けていかなければならないと思い訓練に参加しております。

また、忘れてはならないのは東日本大震災の恐怖です。防災の重要性を改めて認識する上で大きな意味を持ち、そして津波からの避難の重要性を痛感しました。避難訓練がきちんと出来なければ本当に地震が来た時に動ける訳がありません。当たり前に理解していた事ですが訓練を重ねていく中でその気持ちは更に大きくなりました。

新生舎での津波想定避難訓練はのぞみ会本館が建つまでは、紫苑荘のスロープ又はバスでの市役所への避難でしたが、隣接する本館が富津市の「避難タワー」となり、外階段を登って屋上までの避難が可能となりました。

垂直避難でほっと安心する気持ちになったのですが、初めての本館屋上への避難訓練を行ってみると階下が見える階段を登るのに恐怖を感じる利用者様等、普段見ている利用者様の姿ではないので戸惑いがでました。「怪我をせず登り切らなければならない」・「余震で揺れる中を登り切れるだろうか？」の不安も生まれます。ですからこそ利用者様・職員がしっかりと訓練に取り組み続けなければならないと強く思っています。

9月26日は津波想定の合同防災訓練でした。新生舎では併せて利用者様家族の連絡網を使い情報伝達訓練も行っています。事前に確認をし伝達方法を予め打ち合わせましたが実際に行ってみると色々な課題が見えてきました。今回訓練として行った事が次回の訓練に生きるよう取り組んでいかなければならないと改めて思いました。

共同生活援助事業　グレースホーム

グレースホームの年齢事情

世話人　樋口　千恵

どこの障害者グループホームでも抱える問題として「高齢化」があります。グレースホームでもデイサービスを利用されている方が6名、毎日楽しく通われています。みなさんとてもお元気なのですが、身体的には補聴器や車いすの購入、ベッドや浴槽に手すりを設置する等、介護の度合いは高くなっています。大好きな買物外出も、今までは日用品・衣料品・雑貨品とお店をまわっていましたが一か所の買い物で疲れが見え、日用品等は買物代行することが増えてきました。また、グレースホームでは年に2回、近場ではありますが一泊旅行を行っているのですが、転倒等の事故防止の配慮はもちろん、最近ではバイキングって疲れるかな？部屋から大浴場は遠すぎるかな？ベッドじゃないとダメだよね？と考えるようになりました。イベント好きな皆さんの、特に楽しみにしている旅行は何としても続けていきたいものです。できることができなくなってしまうことが増えていきますが、利用者さん本人も支援者もしっかり受け入れて無理のない生活を心掛けたいと思います。

高齢といえば支援者側の職員も高齢化が進んでおりまして（笑）。立ち仕事で大変だと思うのですが、朝は起床から日中活動への送り出しまでの時間、夜は帰宅から就寝までをパワフルに支援しています。更に今年度からは各ホームにパソコンを導入し、教わりながらも意欲的に取り組んでいます。でも元気な気持ちだけではどうしようもない力仕事は一番若手の190㎝超の男性職員が一手に担っておりグレースのヒーローです。

年齢のせいか怒りっぽくなったり、忘れっぽくなったり、疲れやすくなったりしますけれど利用者さんも職員もいつまでも元気で楽しい生活が続くように願っています。けんかや笑い声が聞こえて、グレースホームは今日も元気です。

千葉県中核地域生活支援センター　君津ふくしネット
校内居場所「すまいるカフェ」

管理者　並木　美幸

君津ふくしネットでは、今年度から木更津東高校にて居場所カフェを開催しています。先生方のご協力を得て、月1回、全日制の放課後と定時制の始業前の重なる時間帯に開催し毎回１００名程の生徒さん、20名程の社会福祉協議会やボランティアで構成する運営スタッフさんが参加をしてくださいます。生徒さんの投票で決まった名称「すまいるカフェ」。持ち帰りのできる食料を提供し、ボードゲーム、卓球、勉強、おしゃべりなどをして自由に過ごしてもらいます。

このカフェは子どもの貧困対策推進計画に示される学校と地域との連携により社会全体で子どもの成長を支える仕組みを創ると共に、生徒さんがカフェのスタッフとして活動する機会をつくり役割や活躍を実感できる場、教職員でも家族でもない大人と交流する場、早くに福祉職とつながる場となることを目的としています。

生徒さんに素敵なポスターを作っていただきました。生徒さんの得意を見つけ活かしていく、意見を大事にする、こちらの価値観で見ない、様々な背景を抱える生徒さんが大切な存在であるということを意識し関わりを持っています。私たちも運営をしていく中で生徒さんから福祉の視点だけではない多くのことを教えていただきます。とても楽しく活気のある場です。想いや悩みを話せる関係を築き、卒業後も困った時に繋がるきっかけになると良いなと思います。

中核センターは今年で20周年の節目を迎えます。8月に開催された中核大会では、20年間変わりゆく社会情勢の中でも、中核センターが変わらずに大切にしてきた想いを学びました。「いつでも」「だれでも」「どんなことでも」。法人の理念「愛をもって仕える」ことに通じていると感じます。

これからも君津ふくしネットみんなで同じ方向を向いて、できることを考えていきたいと思います。

特定指定相談支援事業所　望みの門ベテル
嬉しい事と悩むこと

相談支援専門員　藤本　未来

8月のことです。日頃お付き合いのある木更津市内の就労継続支援A型事業所の管理者さんからの相談でした。「利用者の方に相談員がついていないので計画相談を担当してもらえないでしょうか。市内の基幹相談支援センターに連絡してもいっぱいだからと断られて……」障害福祉サービスを利用するには相談員が付くのが原則。何処に依頼したら良いのか困って日常的に連絡を取り合っている望みの門ベテルに連絡をしたというのが正直なところの様です。どんな方、というのも分からず先ずは本人さんと面会してからということに。翌週に伺うとなんと元気の良い女性。しかもまだ初々しい若さ溢れる方でした。「就職して自立したい。母親を助けたい。」というしっかりした考えの持ち主。これまで実習という形で職業訓練を重ねてきましたが職

場環境や周囲と馴染めず足踏みしていた様子。企業の中で障害者が働くというのは周囲の様々な配慮や工夫、本人のある程度の社会性やコミュニケーション能力というものが必要です。本人も周囲に馴染めずという自分自身の課題も感じていたのではないかと思います。受け入れ先の職場環境、従業員の様子、直接の担当者などなどこれまで訪問した会社や企業を思い返します。一般企業の中でたった一人での就労は孤立感や疎外感もあっただろうし本人にとって少々高いハードルだったのかも知れません。本人が入りやすい職場、一緒に働く仲間がいる、そういった場所を求めて改めて考え直すこととなり、君津市内の特例子会社の担当者の方を思い出し、早速相談を取り付け翌月には会社見学の運びとなりました。仕事内容や作業手順をアドバイスしてくれるスタッフさんも側にいて、本人の不得意なコミュニケーションを支えてくれる体制が整っていることが本人にとって安心できるものだった様です。「ここに就職したいです」という答えが返って来たのは見学当日のことでした。後日、10日間の体験実習が設定され、快活で意欲ある仕事姿勢は本人の就業意欲を感じさせると高い評価をいただきました。9月には会社面接が行われ評価通り採用が決定。当面は3か月間のトライアル雇用から始まり、改めて雇用契約する形ですが自分の活躍できる場所、社会や会社が認めてくれる居場所というものがようやく見つかった様です。

この様にとても段取りよく進むケースは年に一回あるかないかというところですが、自信をもって社会で働いている姿というのは相談員としてもやっていて良かったと思える出来事です。

今年は様々なケースが突然飛び込んでくることが多く、特に難病を抱えて地域で生活していくための相談を3名受け持つこととなりました。色素性網膜変性症、パーキンソン病、筋委縮性側索硬化症（ＡＬＳ）いずれも進行性で医療との関わりを多く必要とする方たちです。病名は知っていたとしてもどんな対応が必要なのかはさっぱり分からず、浅い知識ではとうてい太刀打ちできるものではありません。病気の理解から今後の進行に合わせた対応予測、福祉や介護、医療関係者との打ち合わせなどは自分自身にとっても新たな学習の機会となっています。日々「生命」と向き合っている方たちに相談員として何をするべきなのかというのを常に問われているように思います。福祉サービスに繋げるのは当然だけど、その人にとって一日一日が「面白かった、楽しかったよ。」と言えるそんな支援に携われたらいいなと思い、今日も明るく訪問に「行ってきまーす。」

児童養護施設　望みの門かずさの里
職員組織・チームワーク

副施設長　荒井　久美

かずさの里は、7月末から施設長療養中のため、施設長不在で動いています。組織・運営をリードする存在がない中で、何かがあった時「これでよいのか」「どう考える?」「どう判断する?」迷うことばかりです。職員組織として仕事が動いているだろうか、チームで子ども支援ができているだろうか、頭を悩ませてもどうにもできないかずさの里の弱さがずっとそこにあると思います。

発達障がい・情緒障がいを抱える児童の増加に加えて、高年齢児が半数以上を占める今、子ども支援にそれぞれが日々頭を抱えています。「朝起きない」「ご飯を食べない」「口を利かない」「学校に行かない」「無断外出」…子どもの訴えにどう応えよう、どう対峙しよう、みんな悩みます。思いが届かない、伝

わらない日々に心が折れそうになります。そんな時にどれだけ語り合えるか、気持ちを伝えあえるか…。簡単なようで出来ていないこと！価値感の違いを互いに受け入れ、違った意見の中でその時の一番ベターな方法を話し合えるか…。出来ているようで語りが足りないこと！

子どもたちが３６５日暮らす家で、職員はその３分の１程の時間しか職場にいません。「家庭的養護」というけれど、本当の家庭ではないし、同じ職員がひとりの子どもの人生にずっと伴走し続けることはできません。毎日同じ職員が出勤するわけでもないし、職員の入れ替わりもある。……故に、一日一日を交代して積み重ねていく職員全員の「チーム力」が大事で、そこを子どもたちもよく見ていると思います。子どもの安心・安全な暮らしに繋がるのは職員の「チーム力」だと思います。「チーム力」を高めるために何かできること……模索し続けます。互いの弱さを認め合い、強みを生かせるように……

子どもとの関係を築く上で、「期待はしない」「失敗してもいいよ」と自分に言い聞かせながら、「頑張ろうとする気持ちは絶対に持っている！」と信じて待つことが大事かなと思っています。先日はたくさんの方々の協力のもと里感謝祭が行われました。こういう時のチームワークは本当に素敵です。毎年恒例で卒園生も手伝いに来てくれて、近況もたくさん聞きました。社会に出て頑張っている卒園生の姿を見ると、あぁ、また頑張ろう、信じて待とうかな、と思います。「信じて待とう……」大人同士の関わりにも言えることだと思います。

乳児院　望みの門方舟乳児園
子どもと共に暮らす

施設長　井本　千鶴

今日も方舟乳児園には、子どもたちの元気な声が響き渡っています。長く暑かった夏がやっと終わり、お散歩やどんぐり拾いなど、つかの間の秋を楽しんでいます。ハロウィンパーティーが終わり、園内にはクリスマスの飾りが煌めき、とても華やかです。私は、４月に着任し、十数年ぶりの入所施設に戸惑いながらも、子どもたちの笑顔に元気をもらい、あっという間に半年が過ぎました。

さて、方舟乳児園は開設当初より、子どもたちと共に暮らすことを大切にしてきました。家庭と同様にはできませんが、施設だから○○できないのは仕方がないと我慢を強いることは、できる限り少なくしたいと思っています。方舟乳児園は乳児院の最小規模である、定員九名の利点を生かし、生活全般において介助ではなく、一緒に食事を愉しみ、一緒に眠り、一緒に遊ぶ。身近にいる大人と共に泣き、笑い、愛されていることを実感し、安心を感じてもらえることを最優先にしています。

乳幼児期に自分自身への肯定感や周囲への信頼感を獲得することは、これから先の長い人生の中で、困難なことに出会ったときに乗り越えていくための大きな力となります。

私たちの仕事は、小さな苗木に肥料を与えるような仕事だと思っています。すぐに成果が見えるものではありませんが、いつか大きな木となるためには、決して手を抜くことができない大切な大切な仕事です。私たち職員は、子どもたちが大人になるまで、一緒に過ごすことはできませんが、子どもたちがここで培った、自己肯定感や信頼感を持って、大きく羽ばたいてくれることを願って、日々子どもたちと関わっています。これからも職員一丸となって、子どもたちと共に歩んでいきたいと思います。今後ともご支援の程、どうぞよろしくお願いいたします。

児童心理治療施設　望みの門木下記念学園

性教育委員会、発足。

児童指導員　山本　朋美

全国児童養護施設サークル主催の秋季セミナー（テーマは「包括的性教育」）を受講したのが昨年12月。その後出勤した私はその足で園長室のドアを叩き「木下記念学園にも性教育委員会を作りましょう！」と直談判をした記憶があります。今、思えば2泊3日の研修で脳内に性教育をパンパンに詰め込まれ私の頭は少しおかしな事になっていたのだろうと容易に推察できますがその時の園長との会話の中で覚えていることは「委員会を立ち上げるためにはまず何をしたらいいと思う？」と尋ねられ「職員がまず学習する事だと思います」と答えた事と「私は（性教育委員）無理ですよ、マルトリ委員なので」と一言添えたことです。

包括的性教育とは身体や生殖の仕組みだけでなく人間関係や性の多様性、ジェンダー平等、幸福など幅広いテーマを含む教育であり子どもが性生活において適切で健康的な選択をするための知識、態度、技能、価値観を身につけることを目的とした、カリキュラムに基づく性教育の指導法を指します。

今どきの子ども達を取り巻く環境はインターネットの普及に伴い、つながるサイトには性に対してだけに限らず不適切な情報が溢れておりアダルトサイトでは暴力的な性情報が氾濫、ＳＮＳではユーザー間での個人情報の氾濫や誹謗中傷など様々な問題が発生しています。　その時の私は本気で子ども達に性についての正しい知識を得る機会を設けてあげたいと思っていたのです。さて忘れていた頃今年４月木下記念学園には性教育委員会が立ち上がり私は委員になっていました。（マルトリ外されたー）と思いつつ「もっと知識を深めなきゃ！」と思ったのも事実でそこから、性教育において遙か先を走っておられる施設を訪問し実際の活動を見せていただいたり研修会に参加したりと準備を勧めて参りました。ここからが実践です。月に１回、年齢別にグループ分けを行い年齢にあった内容を分かりやすく動画や絵本を使って理解を深めていこうと考えています。まず最初に子ども達に伝えたいのは「みんな一人一人とっても大切な存在なんだよ」「自分を大事にしようね」ということです。自分にとっても初めての性教育を子どもと学びながら共に成長し続け、ゆくゆくは性教育のプロになろうと思っています。

児童家庭支援センター　望みの門ピーターパンの家
【手造り】

心理相談員　斎藤　美紀

ピーターパンの家では子どものいるご家庭の相談を聞いています。子どものことで相談と言っても、何に困っていて、どのように話を聞いてもらいたいのかは人によって違います。明確なアドバイスが欲しい人もいれば、ただ話を聞いてもらいたい人もいる。子育てに正解はありません。いろいろな子どもがいるように、いろいろな親（大人）がいる。発達に凸凹があろうとなかろうと、みんな違います。

漫画『フルーツバスケット』の主人公透の母親の言葉で、「良心（やさしさ）は個人個人の手造りみたいなモンだから、誤解されたりギゼンだと思われやすいんだよな」という言葉があります。子育ても、まさに個人個人の手造りなのではないでしょうか。だからこそ、これで良いのかと不安になったり、他にやり方があるのではないかと迷ったり、良かれと思ってやったことが空回りすることも。それは、親子の関係だけではなく、夫婦や友人、職場のあらゆる人間関係に通じることだと思います。逆に言えば、子育ても人間関係。そう思うと上手くいかないことがあって当然だなと思います。

『フルーツバスケット』の良心の形の話は、こう続きます。「疑うなんて誰にでもできる簡単なことだし 透は信じてあげな。透は信じてあげられる子になりな。それはきっと誰かの力になる」当時小学生だった私はとても素敵な言葉だと感銘を受けました。でも、大人になった今は、小学生の娘に求めるレベル高すぎではないかとも思うのです。他者視点を持つことは社会生活を送る上で必要なスキルです。でも、その前に自分の気持ちを大切にしてほしい。誰にとっても「良い人」なんていないのだから。自分を知るその先に、ほどよい人間関係があるのではないかと私は思います。ピーターパンの家は、大人も子どもも元気になれる場所を目指して活動をしています。私たちにあなたのことを教えてください。お待ちしております。

令和６年度 第11回職員実践発表大会報告

10月29日（火）君津生涯学習交流センターを会場に望みの門実践発表大会を開催しました。望みの門の12事業所が日頃の働きの様子を９分間にまとめて発表します。審査員は東京ＹＷＣＡヒューマンサポートセンター田島誠一理事長。聖和大学短期学部宗政朱利専任講師、学校法人愛隣学園木下勝世理事長、木下宣世理事長、西尾建常務理事の５名です。田島審査員からは11回目を迎える実践発表大会は回を追うごとにレベルアップしていて今後は実践発表研究大会にしても良いのではとのお言葉を頂きました。

最優秀賞には女性自立支援施設望みの門学園の「女性支援法が志す自由とは？自立した自由を手にするために！～売春防止法からの脱却を目指して～」優秀賞に就労継続支援事業望みの門新生舎の「印象的な外部アプローチについて考える～私たちの施設の魅力を伝えよう～」老人デイサービス事業望みの門デイサービスセンターの「地域で選ばれ続けるデイサービスセンターを目指して～集客率の増加と多様なニーズにこたえたオリジナルサービスの取り組み～」が選ばれました。

またＮＰＯ法人ホッとスペース中原代表・中原キリスト教会佐々木炎牧師による「なぜ私たちはこの法人で仕事をするのか」と題した福祉講演を頂き、先生の熱い思いのこもった実践報告を伺うことが出来ました。秋雨の一日、望みの門は神さまから多くの実りを頂き、利用者の皆さまに、そして地域の皆さまに仕える働きをさせて頂いていることへの思いを新たにする良い機会となりました。

佐々木炎牧師の講演

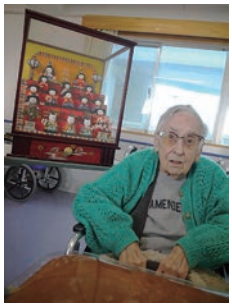
実践発表風景

大会の模様は動画でご覧になれます。

https://www.youtube.com/playlist?list=PL6Gzuld3Tu16sV6Ysx_oyBzuZO2tYvV8b

表彰受賞者たち

訃報



時下ますますご清栄のこととお喜び申し上げます。
日頃、のぞみ会の事業運営にご協力頂き厚くお礼申し上げます。
さて、当法人 名誉望みの門学園長 木下ドーラ（享年98歳）が11月8日午前11時55分永眠いたしました。
生前のご厚情を深謝し、ご通知申し上げます。
なお、葬儀は故人の遺志により親族のみで執り行い、後日左記の日程で「記念会」を執り行う予定です。
ご出席の際は平服にてお願いします。また故人の遺志によりお花料等は辞退させて頂きます。

社会福祉法人ミッドナイトミッションのぞみ会
理事長　**木下　宣世**

記

一．**日時**
2024（令和6）年12月26日（木）
午後1時

一．**場所**
望みの門本館「シオンホール」
富津市川名1436番地
☎0439（87）9381

編集後記

敬愛します木下ドーラ先生へ

11月8日。その知らせは午後の仕事をサボり、映画館にいた私の振動するスマホが知らせてくれました。29年前のぞみ会に入職した当時、先生は婦人保護施設望みの門学園の園長として日々本当に忙しくご活躍されていました。利用者にも職員にも分け隔てなく、容赦もなくご指導されているところをいつもびくびくしながら拝見していました。小さなお体のどこにそのエネルギーはあるのですか。そうそう先生が公用車を運転されると運転席からお姿が隠れてしまい「無人の車が走っている！」と街をザワつかせていましたね。

ある日先生からパン作りを教わっている時、私が割った卵の殻を捨てようとすると「それはまだ捨ててはだめです」と人差し指で殻の中に残っている白身を掻き出されてこうおしゃいましたね。「ドイツ人はこれで家を建てます」思わず目がテンになりました。今ならいろんな意味で絶対にアウトな案件です。また、ご一緒にバザー献品を頂きに市川まで出かけた時、昼食をスーパーのフードコートで食べましたね。先生はヨーグルトとチーズだけなので、慌てて持っていたかつ丼弁当を棚に戻し、サンドイッチと交換しました。その独特な食習慣が元気の源なのですか。新生舎が竣工した時、普段目にすることのない素敵なドレス姿で実にうれしそうな笑顔でいらっしゃったこと、今でも鮮明に記憶の中に残っています。

良くも悪くも昭和な雰囲気で学園は先生を中心に法人の中でひときわエネルギッシュな存在でした。でも先生、令和となった今年、売春防止法に代わり女性自立新法が誕生しました。女性の福祉、権利擁護を謳う新たな法律の下、婦人保護施設は女性自立支援施設となりました。当時の学園の規則もほとんどなくなりました。先生が今の学園をご覧になったら、きっと目がテンになってしまいますね。しかし私たちは先生が命をかけ実践されました「愛をもって人に仕える」の精神を大切に守っていきます。

まだ20代の頃の先生がなぜ縁もゆかりもない日本の女性の隣人となるためにはるばる海を渡ってドイツからいらっしゃったのか。その後、なぜその生涯を日本の福祉のために捧げられたのか。直接伺うことは残念ながらもう叶いません。経験が浅く、自らの価値観に囚われてしまっている私には、とても理解ができません。でも、それはきっと人の理解を超える神さまの真理に対する先生の誠実な証しなのですね。力一杯生き抜いた先生の生き方に習い、私たちもまた与えられた日々を大切にして、愛をもって人に仕えていくことができますよう天国から見守っていてください。ありがとうございました。

T2